

論文審査の要旨(甲)

| | |
|--|--|
| 申請者領域・分野 氏名 | 腫瘍制御科学領域婦人科腫瘍学教育研究分野 氏名 追切裕江 |
| 指導教授氏名 | 横山 良仁 |
| 論文審査担当者 | 主 査 水上浩哉 副 査 鬼島 宏 副 査 青木昌彦 |
| (論文題目) Adenocarcinoma of the cervix: Its prognosis and difficult pathological diagnosis (子宮頸部腺癌の予後の検討と組織診断の困難さ) | |
| (論文審査の要旨) 近年、本邦で子宮頸癌は罹患率、死亡率ともに増加傾向にある。組織型においては扁平上皮癌 (SCC) が最も多く、次いで腺癌 (AC) である。AC および腺扁平上皮癌 (ASC) は治療抵抗性を示すため、SCC と比較すると予後不良である。2014 年に子宮頸部腫瘍の WHO 分類が改訂され、AC の分類がそれ以前の分類から変更された。本研究では AC を新分類に従って再評価し、AC・ASC の予後について再検討を試みている。 2001 年から 2011 年まで子宮頸癌と診断された 204 例を発症年齢、組織型、FIGO 進行期分類、治療法、5 年生存率について後方視的に検討し、病理組織について WHO 分類 2014 に従って再評価を行っている。組織型のうち、AC 11% (22 例)、ASC 4% (9 例)であった。FIGO 進行期分類では AC・ASC は SCC と各進行期において有意な差を認めなかった。進行期別、初回手術施行例の 5 年生存率は、SCC と AC・ASC 間に有意差を認めなかった。しかしながら、SCC では I・II 期で手術施行例と放射線療法 (RT) 施行症例の 5 年生存率は同等であったが、AC・ASC の RT 症例では有意に低下していた。 WHO 分類 2014 に基づいて AC を病理組織学的に再評価した結果、AC 21 例中 8 例 (38%) が異なる診断となった。そのうち 6 例が、類内膜癌から内頸部型腺癌通常型の診断へと変更された。1 例で診断医間の相違が見られた。 以上の結果は当該施設では AC・ASC は SCC に劣らず予後が良好な傾向にあることを示唆している。AC・ASC の I・II 期において手術例と RT 症例で予後が異なり、早期発見、手術の重要性が示唆された。また、子宮頸部腺癌の組織亜型診断は困難であり、適切な診断によってより適した治療法の選択が必要である。本研究の結果は AC、ASC の診断、予後の改善につながる可能性があり、新規性、有用性も妥当であり、学位授与に値する。 | |
| 公表雑誌等名 | European Journal of Gynaecological Oncology (掲載時期未定) |